言語を通して見る異文化(2)
ーフランス語と日本語ー

成戸　浩嗣
(愛知学泉大学現代マネジメント学部)

0. はじめに

外国語を学び、正しく運用するためには、その言語の背景にある社会の価値体系を知る必要があることに対して異論をはさむ余地はないであろう。さまざまな言語現象の中には、言語話者のものの見方・考え方を反映したものが多く観察され、それらは文字や音声という具体的な形で存在するものであるだけに、「言語を通しての異文化理解」は確実性が高く、かつ有効な方法の一つであると考えられる。

成戸ゼミでは、2003 年度より 2010 年度にわたって、異文化理解について知ることを目的として英語、フランス語、中国語、韓国(朝鮮)語圏における価値観やものの見方・考え方についての学習を行ない、その内容は成戸 2008、同 2010 a 、同 2011 にまとめられている。これらのうち、成戸 2011 は「フランス語と日本語」を対象とし、日本語の側から見た場合にうきぼりとなるフランス語の特徴を通してフランス語話者のものの見方・考え方の一端についてまとめたものである。具体的には、フランス語の入門・初級レベルで学習するいくつかの語彙・文法現象を日本語のそれと対照させながら、フランス語教育において従来からなされてきた説明とは異なる観点、すなわち「日本語話者から見たフランス語」という観点からフランス語話者のものの見方・考え方について概観した。しかしながら、そこで対象となった語彙・文法現象はきわめて限定されたものであり、考察対象となりえる余地のあるものが他にも多く存在する。語彙についていえば、フランス語学習の初期段階においては(他の言語を学習する場合と同様に)、新しい語が登場するごとに一つあるいは必要に応じて数個の日本語の単語を対応させて紹介するのが通例である。いうまでもなく、異なる言語間において対応するとされる語の間には、意味の上で重なる部分とそうでない部分が存在し、対応関係も一対一のそれではない。このこと自体は自明であるものの、学習の初期段階においてはそのようなことに注意を向ける余裕もなく、次々に登場する新出語彙を覚えるのに大半の時間と労力が費やされる。しかし、学習者のレベルが上がり複雑な内容を表現する必要性が高まるにつれ、名詞・動詞・形容詞などの具体的概念や、それらと組み合わされる機能語についてのより高度な知識が求められるようになる。教育現場においては基本語彙の紹介に際し、これらのことをふまえたさまざまな工夫がなされていると思われるが、教育体系そのものにおいても、学習者に対して早い段階から注意を向けさせるような配慮が必要であろう。

本稿は、フランス語学習の入門・初級段階で登場する語彙・文法現象のうち、成戸 2011 ではとりあげなかったものを日本語と対照させ、両言語話者の間におけるコトガラのとらえ方の相違をうきぼりにすることによって異文化理解の一助とするとともに、日仏対照研究および日本語話者に対するフランス語教育に対して新たなテーマを提示することを目的とする。

1. 名詞をめぐる問題

1.1 フランス語名詞と“dans”、“sur”

周知のように、フランス語名詞には有情物・無情物のいずれを表わすかにかかわらずいわゆる男性名詞と女性名詞の区別があり、名詞によっていずれに属するかが決まっていたり一つの名詞に男性形・女性形が存在するという現象がみられ、いかなる冠詞をとるかということや、共起する動詞・形容詞の男性形・女性形の区別とも関わっている。名詞の学習に際してこのような形式上の特徴についての知識を習得することに多くの時間が費やされるのは致し方ないことであるが、語の適切な運用のためには、日本語名詞との対応関係そのものにも目を向ける必要がある。このことは、入門・初級段階に登場する基本語彙の中にも、

イ. appareil ── 電話機、カメラ
billet ── 切符、紙幣
bureau ── 机、事務所・事務室
femme ── 女性、妻
sac ── カバン、袋

のように、複数の日本語名詞との間に対応関係が成立するケースや、

ロ. 足(あし) ── “pied／(くるぶしから下の)足”、“jambe／脚、下肢”
椅子 ── “chaise／(ひじ掛けなしの)椅子”、“fauteuil／ひじ掛け椅子”
駅 ── “gare／(鉄道の)駅”、“station／(地下鉄の)駅、(バスの)停留所”
風 ── “brise／そよ風・微風”、“souffle／風、微風・そよ風”、“vent／風”
部屋 ── “chambre／寝室、(ホテルの)部屋”、“pièce／(アパルトマンなどの)部屋”、“salle／(特定の目的をもった共用の)室、ホール”

のように、一つの日本語名詞に対して複数のフランス語名詞が対応するケースが少なからず登場することによっても理解できよう。いずれも具象物を表わす基本語彙であり、覚えるのにとりたてて支障はないと感じられるものの、語の暗記という作業を離れてながめてみると、両言語間で対応する名詞の間には意味特徴の相違があちこちに存在することが容易にみてとれる。このような点に注意を向ける必要性は、学習が進み抽象的な概念を表わす名詞が多く登場するようになるにしたがって高まっていく。

成戸 2011：22-23 でとりあげた「椅子」と“chaise”、“fauteuil”との対応関係は、上記のロに属するものである。フランス語では別個の語によって区別されるものが、日本語では「(ひじ掛けなしの)椅子」と「ひじ掛け椅子」のように二次的な区別がなされているにとどまる。フランス語において“chaise”、“fauteuil”という異なる語が存在することは、名詞レベルの相違にとどまるものではなく、“s'asseoir(すわる)”という動詞との組み合わせにおいていかなる前置詞が用いられるかという相違につながっている点についても成戸 2011 でふれた。すなわち、ひじ掛けのない“chaise”にすわる動作は「の上(ウエ)／表面」を含意する“sur”を用いて

(1) Assieds-toi **sur** cette chaise.
／この椅子ニかけてね。(21 世紀：767)

のように、ひじ掛けのある“fauteuil”にすわる動作は「の中(ナカ)」を含意する“dans”を

用いて

(2) Asseyez-vous **dans** ce fauteuil, Monsieur Lecomte.
／この肘掛け椅子ニおかけ下さい、ルコントさん。（同上：771）

のように表わされる[1]。このことは、名詞が表わす事物と動作との関わり方を異なるものとして“s'asseoir **sur** une chaise”、“s'asseoir **dans** un fauteuil”のように表現するフランス語話者と、両者を区別せず、「椅子／ひじ掛け椅子ニすわる」のように表現する日本語話者との間における認識の相違と表裏一体である。

同様の例としては、「通り、道(路)」を表わす語である“rue”、“avenue”、“boulevard”などが挙げられる。中村2001 a：25によれば、“rue”は「建物や家並に沿った通り」である。また、『ディコ仏和辞典(“rue”の項)』には、“rue”は「両側に人家の並ぶ街路」であり、並木のある大通りは“avenue”あるいは“boulevard”とよばれる旨の記述がみられる。さらに、篠沢／マレ2003：2、8-9は“avenue”、“boulevard”の語源からくる相違にふれ、前者は「どこかから来る→中心地へ向かって横切って行く」、後者は「城壁上部の盛り土→城砦」のような意味の変遷を経ており、かつての城壁跡に都市を取り囲む形の“boulevard”に対し、“avenue”は都市の周辺部から中心へ向かうという相違がある[2]一方、“rue”の場合は「通りと通りをつないでいる」という特徴を有するとしている。これらの記述からは、“rue”、“avenue”、“boulevard”がそれぞれ都市のどのような部分を構成するかの相違がみてとれ、通りの名称が都市全体の構造に合わせてつけられていることがうかがわれる。“rue”、“avenue”、“boulevard”は都市における地名に多く用いられており[3]、行き先を尋ねたり教えたりする際に頻繁に使用されるため、これらの区別は入門・初級段階における重要知識の一つであるといってよい。

前述したように、“rue”は両側に建物が並んでいることを含意する語であり、動作が行なわれる場所として示す場合には、例えば

(3) Julie et Claudia font une enquête **dans** la rue. (REFLETS 1 : 46)
／ジュリーとクローディアは通りデアンケートを行なっている。

のように“dans”が用いられる。前述したように、“dans”は「の中(ナカ)」を含意しており、“dans la rue”は建物で囲まれたその内部[4]を表わしている点において、

(4) J'ai rencontré Mami **sur** l'avenue des Champs-Elysées.
／私はシャンゼリゼ大通りデ真美に出会った。(21 世紀：732)

(5) J'ai rencontré Mami **sur** le boulevard Saint-Michel.
／私はサン＝ミッシェル大通りデ真美に出会った。(同上)

のような、「の上(ウエ)／表面」を含意する“sur”と組み合わされる“avenue”、“boulevard”などのケースとは異なる。但し、“avenue”は“dans”、“sur”のいずれと組み合わせることも可能であるとされ、このことは、“avenue”を囲まれた空間とみなすか否かが話者の判断に左右されるケースが存在することを示している[5]。“dans”により動作がその内部で行なわれる空間として示

されるものとしては“rue”のほか、“couloir(廊下)”、“escalier(階段)”などがある。泉1989：69の記述にみられるように、これらはいずれも周りを囲まれた形ととらえられており、例えば

(6) Benoît rencontre un collègue **dans** un couloir de l'agence de voyages.
(REFLETS 1 ：126)
／ブノワは旅行代理店の廊下デ一人の同僚に出会う。

(7) J'ai parlé avec Paul **dans** l'escalier.
／階段デポールと立ち話をした。
(泉1989：69)

のような表現に用いられる。

ある空間において動作が行なわれることを表わす場合に、トコロを表わす名詞が動詞と結びつくためにどのような前置詞を必要とするかについて知っておく必要があることはいうまでもないが、前置詞の選択にあたっては、上記のように名詞の表わす事物に対する話者の認識の仕方が深く関わっているため、この点について理解しながら学習を進めることが求められよう。動作と空間の関わりに関する情報は、「いつ／誰が／何を」などとともにコトガラを構成する重要な要素であり、フランス語話者が客観世界をどのようにとらえているかを具体的な形で知るための手がかりでもある。

1.2 “dans・N”に対応する「N・格助詞」

“dans・N”を用いた動詞表現を日本語に置き換えた場合、“dans”に対しては様々な日本語格助詞が対応する。また、置き換えられた日本語表現の中には、Nが空間を表わす名詞(トコロ名詞)であるケースのほか、モノを表わす名詞(非トコロ名詞)であるケースも存在する。以下にいくつかの対応パターンを挙げ、“dans”と日本語格助詞との間にみられる相違を概観していくこととする[6]。

①「N・デ」が対応するケース

このケースには、「デ」と組み合わされるNがトコロ名詞の場合、非トコロ名詞の場合がある。

①a ── Nがトコロ名詞：「デ」は動作が行なわれるトコロを示す

(3) Julie et Claudia font une enquête **dans** la rue.
／ジュリーとクローディアは通りデアンケートを行なっている。

(8) Les enfants jouent **dans** le jardin.
／子供たちは庭デ遊んでいる。
(500語：236)

(9) Mon mari prépare le dîner **dans** la cuisine.
／夫はキッチンデ夕食の仕度をしている。
(同上：19)

①b ── Nが非トコロ名詞：「デ」は動作の手段(いわゆる道具)を示す[7]

(10) Les Russes ont l'habitude de boire leur thé **dans** un verre.
／ロシア人は、グラスデ紅茶を飲む習慣がある。
(山田2005：49、『現代フランス語前置詞活用辞典』)

(11) Cherche ce mot **dans** le dictionnaire.
／その単語を辞書デ探しなさい。

（中村 2001 a ：24）

(12) Regarde-toi **dans** le miroir.
／鏡デ自分を見てごらん。
（21 世紀：772）[8]

①のケースについては成戸 2010 b において考察を行なっているため、詳細はそちらにゆずる。動詞表現に用いられてトコロを示す「デ」の使用条件は、「主体がトコロに存在する」ことであるため、Nが表わす事物は主体が占めるだけの広さをもった空間であり、動作によって移動させられないことが要求される[9]。これに対し“dans”の場合には、客体に対し容器として機能するものでありさえすれば主体が占めるだけの広さをもつ必要はなく、また、動作によって移動させられる事物であってもそれをトコロとして示すことが可能である。

②「N・ニ」が対応するケース

①のケースと同様に、「ニ」と組み合わされるNがトコロ名詞の場合、非トコロ名詞の場合がある一方、両者の間には共通点がみられる。

②a ── 「ニ」は事物が存在するトコロを示す

Nはトコロ名詞あるいは「の中」をともなった非トコロ名詞である。

(13) Il y a au moins une télévision **dans** chaque maison.
／各世帯ニ少なくとも一台はテレビがある。（21 世紀：222）

(14) Où est ton père？ ── Il est **dans** le jardin.
／お父さんどこ。 ── 庭ニいるよ。

（青木 2002：74）

(15) Mon mari est **dans** la voiture.
／夫は車の中ニいます。
（NHK2003 年 4 月号：35）

また、

(16) Ce matin, Il y avait beaucoup de neige **dans** la cour de récréation.
／今朝は、校庭ニたくさん雪が積もっていた。（21 世紀：770）

(17) **Dans** cette bouteille, il y a peu de vin.
／このびんの中ニはワインがほとんど入っていない。（泉 1989：68）

(18) Teruo habite **dans** le village voisin du mien.
／輝男は私の村の隣村ニ住んでいる。
（21 世紀：222）

における日本語表現は、存在のあり方を具体的に表わしたものであるということができる。この点については、森田、奥田の以下のような記述が参考となろう。森田 1989：888 は、「ニ」が場所を表わす語に付いた場合には、主題たる事物や行為の対象が「ニ」によって示される場所に存在したり、存在することによって起こる結果や状態を表わすとして「ある、いる、続く」などの状態動詞とともに、継続や状態の「ている／てある」形式が多く用いられるとしている。また、奥田 1983 b：284 には、に格の名詞が「ある、いる」などの存在動詞と組み合わさると、存在という状態が成立するために必要なありか

を示す一方、存在動詞に近い「すむ、とまる、滞在する、宿泊する」のような動詞は、存在のむすびつきを表わす単語の組み合わせに近い単語の組み合わせをつくる能力をもっているとしている。

②b ── 「ニ」は客体あるいは主体の移動先（トコロ／非トコロ）を示す

Nがトコロ名詞の場合と非トコロ名詞の場合があるが、いずれも動作の結果として客体あるいは主体が「ニ」により示される到達点まで移動することを表わす[10]。

客体の移動先を示す場合

Nがトコロ名詞であるものとしては、例えば

(19) Tu laisses trop de choses **dans le grenier**.
／グルニエニたくさんのものを置きすぎてますよ。（中村 2001 a ：98）

(20) Tu mets cette chaise **dans le coin**, près de l'armoire, …….
（REFLETS 1 ：135）
／この椅子を（部屋の）すみニ、キャビネットのそばに置いて、……。

が、非トコロ名詞であるものとしては、例えば

(21) Je mets un marque page **dans ce livre**.
／私はこの本ニしおりをはさんでおく。
（中村 2001 a ：98）

(22) Range la vaisselle **dans le buffet**.
／食器を食器棚ニ片付けなさい。
（同上：116）

が挙げられる。いずれの場合も動作を受けた客体は最終的に到達点に位置することとなる[11]。

主体の移動先を示す場合

Nがトコロ名詞であるものとしては、例えば

(23) On entre **dans un café**？
／カフェニ入りますか。
（中村 2001 a ：49）

(24) Bon, ben, s'il n'y a rien à faire, je retourne **dans mon bureau**.
（REFLETS 1 ：135）
／よし、じゃあ、することが何もないのなら、僕は自分のオフィスニ戻るよ。

(25) Le criminel est pénétré **dans la chambre**.（青木 2005：252）
／犯人は部屋（のなか）ニ逃げ込んだ。

が挙げられ、主体の移動そのものを表わす。一方、Nが非トコロ名詞であるものとしては、例えば

(2) Asseyez-vous **dans ce fauteuil**, Monsieur Lecomte.
／この肘掛け椅子ニおかけ下さい、ルコントさん。

(26) Allez, Fabien, monte **dans la voiture**.
／さあファビアン、車ニ乗って。
（NHK2003年5月号：38-39）

(27) Germain, ne monte pas **dans l'arbre**！
／ジェルマン、木ニ登っちゃだめ！
（21世紀：771-772）

が挙げられ、主体の移動をともなう動作を表わす。

「N・ニ」を用いた動詞表現の場合には、動作はトコロあるいは非トコロに向かうものである[12]。これに対し“dans・N”の場合には、「トコロ・デ」を用いた動詞表現との対応関係が成立する①のようなケースが存在することからも明白なように、動作がトコロあるいは非トコロに向かうか否かは問題とはならない。“dans・N”が動作とトコロあるいは非トコロとの方向的な関係の有無とは関わりなく用いられることは、「N・ニ」とは反対の空間的方向性を有する「N・カラ」を用いた表現が対応する

③「N・カラ」が対応するケース ── 「カラ」は動作の起点を示す

(28) Qu'est-ce qui t'arrive？ ── Je suis tombée **dans** l'escalier.
／どうしたの。 ── 階段**カラ**落ちちゃって。(21 世紀：222)

のようなケースが存在することによっても明白である[13]。

“dans・N”に対応する「N・格助詞」としては、さらに以下のようなものが挙げられる。

④「N(トコロ)・ヲ」が対応するケース ── 「ヲ」は「移り動くトコロ」を示す[14]

移動動作を表わす動詞と組み合わされた“dans・N”に対しては、例えば

(29) Je vais **dans** la même rue.
(REFLETS 1 ：95)
／私も同じ道**ヲ**行くの(＝行き先が同じなの)。

(30) J'ai vu Paul marcher **dans** la rue.
(久松 1999：77)
／私はポールが通り**ヲ**歩いているのを見た。

(31) Les oiseaux volent **dans** le ciel.
／鳥たちが空**ヲ**飛んでいる。
(青木 2002：74)

のように、トコロの範囲内における移動動作を表わす「N(トコロ)・ヲ」が対応するケースが存在する。

移動動作を表わす表現において「トコロ・ヲ」が用いられた場合には方向性の定まった移動を表わす傾向があるのに対し、「トコロ・デ」が用いられた場合には方向性の定まらない移動を表わす[15]。このような相違は、方向性の定まった移動を表わす

(32) 公園**ヲ／＊デ**通る。

においては表現成立の可否として明確にあらわれる一方、方向性の定まらない移動を表わす

(33) 公園**ヲ／デ**散歩する。

においては「デ」、「ヲ」いずれによるトコロ表示も可能であるという形となってあらわれる。

一方、“dans・N(トコロ)”の場合には、日本語の「デ」、「ヲ」のような使い分けをするためのペアとなる前置詞が存在せず、方向性の定まった移動を表わす(29)のような場合や、方向性が定まっているか否かが不明な移動を表わす(30)、(31)のような場合、さらには

(34) Mon père se promenait **dans** le parc

tous les matins.（久松 1999：78）
／私の父は毎朝公園ヲ散歩したものだ。

(35) Je viens de faire un tour **dans** le quartier.
／今、この辺りヲひと回りしてきたところなんだ。
（NHK2003年9月号：40-41）

のような方向性の定まらない移動を表わす場合のいずれに用いることも可能である。

①～④からは、日本語においては様々な格助詞により異なる結びつきとしてとらえられている名詞と動詞との組み合わせが、フランス語においては“dans”により一つのカテゴリーに属するものとしてとらえられていることが理解できよう。入門・初級のテキストには、①～④の各ケースにあてはまる表現例が少なからず登場するものの、日本語格助詞との対応関係についてまでは言及されないのが通例である。しかし、このような点に注意をはらいながら学習を進めることは、“dans”と同じくトコロを示す働きをする前置詞“sur”[16]や“sous”などとの本質的相違を理解することにつながるほか、学習段階が進むにつれて多く登場するようになる、抽象名詞と組み合わされる前置詞の用法を理解しやすくすることにもつながる。

本章でとりあげた“dans・N”表現をみる限り、表現を構成する単語の意味を学習者が理解してさえいれば、自然な日本語に置き換えるのにそれほどの困難はないと思われる。しかし、日本語からフランス語に置き換える場合には、“dans”がどのような名詞に付加され、さらに“dans・N”の形でどのような動詞と組み合わされるかについてのより詳細な知識が必要となる。フランス語から日本語への置き換えに際しては自然な日本語表現とすること、すなわち日本語話者の発想を反映させることに比重が置かれるのに対し、日本語からフランス語への置き換えに際しては、フランス語話者の発想を反映させることに比重が置かれるためである。

2. 動詞をめぐる問題

1.1 で紹介した名詞の場合と同様に、動詞についても日仏両言語間で対応する語の間に意味特徴の相違がみられる。本章では、対応のあり方において特徴的ないくつかのケースをとりあげることとする。

2.1 動作の方向性 ── “apprendre”、“louer”

“apprendre”は、日本語においては「習う・学ぶ」、「教える」のように別個の動詞によって表わされる動作のいずれを表わすことも可能であり、例えば

(36) Maintenant, il **apprend** à conduire.
／今、彼は運転を**習っている**。
（500語：147）

(37) Elle **apprend** le français depuis trois ans.
／彼女は3年前からフランス語を**学んでいる**。
（『ディコ仏和辞典』“apprendre”の項）

(38) Il **apprend** le japonais aux étrangers.
／彼は外国人に日本語を**教えている**。
（同上）

(39) C'est ma mère qui m'a **appris** à tricoter.
／私に編み物を**教えてくれた**のは母です。
（同上）

のような表現が存在する。これらのうち、(37)、(38)においては、“apprendre”の後にそれぞれ“le français”、“le japonais”が続く一方、(38)の場合には「誰に」を表わす成分である“à＋ヒト”すなわち“aux étrangers”が続く点で(37)とは異なる[17]。また、“apprendre”が「習う・学ぶ」を表わす場合には、例えば

(40) Elle a **appris** à jouer du piano avec sa mère.
／彼女は母親からピアノを**習った**。
(21 世紀：42)

のように「誰から」が“avec＋ヒト”によって表わされるケースが存在する。

“louer”も同様に、日本語であれば「借りる(＝賃借りする)、貸す(＝賃貸しする)」のように別個の動詞によって表わされる動作のいずれを表わすことも可能であり、以下のような表現例が存在する。

(41) Je voudrais **louer** une voiture pour une semaine.
／車を1週間**借り**たいのですが。
(『ディコ仏和辞典』“louer”の項)

(42) Elle **a loué** une maison.
／彼女は家を**借りた**。(21 世紀：319)

(43) Elle **loue** un appartement à un jeune ménage.
／彼女は新婚夫婦にマンションを**貸す**。
(中村 2001 a：102)

(44) Elle a une maison à **louer**.
／彼女には**貸す**家がある。
(21 世紀：319)

「習う・学ぶ」と「教える」、「借りる」と「貸す」はいずれも、主体、相手、客体の三者によって成立する動作であり、一つのコトガラを「相手→主体」、「主体→相手」のいずれの方向性を有するものとしてとらえるかによりそれぞれ区別したものである[18]。“apprendre”、“louer”に対してそれぞれ「習う・学ぶ／教える」、「借りる／貸す」のような別個の動詞を対応させるのは、「相手→主体」、「主体→相手」のような動作の方向性による区別が日本語に存在するからであって、“apprendre”、“louer”自体にはそのような区別は存在しないとみるのが妥当であろう[19]。「習う・学ぶ／教える」、「借りる／貸す」は、動作の方向性の相違によって使い分けがなされる点において、“apprendre”、“louer”に比べるとより分析的であるということができよう。ちなみに、上記のような対応例は日本語と中国語との間にも存在し、“借 ── 借りる／貸す”や“给 ── くれる／あげる”のような対応関係がみられる[20]。

2.2 動詞の自他と表現構造 ── “commencer”、“finir”

目黒2000：227の記述にみられるように、フランス語における自動詞と他動詞の区別は各動詞に固定したものではなく、自動詞、他動詞のいずれとして用いることも可能な動詞が少なくない。“commencer”、“finir”はそのような動詞の例であり、以下のように、日本語であればそれぞれ「始まる／始める」、「終わる／終える」のような自動詞、他動詞のペアによって区別される動作のいずれを表わすことも可能である[21]。

(45) Le concert **a commencé** à huit heures

et demie.
／コンサートは８時半に**始まった**。
（『ディコ仏和辞典』“commencer”の項）

(46) Nous **commençons** tout de suite ce travail.
／私たちはその仕事をすぐに**始めます**。
（久松 2011：146）

(47) Le concert **finira** en pleine nuit.
（『ディコ仏和辞典』“finir”の項）
／コンサートが**終わる**のは夜中になる。

(48) Quand je l'ai rencontrée, elle venait de **finir** son travail.
／私が彼女と出会ったとき、彼女はちょうど仕事を**終えた**ところだった。
（久松 2011：289）

“commencer”、“finir”を用いた表現を日本語に置き換える際に日本語の自動詞、他動詞のいずれを用いるかに対しては、“commencer”、“finir”が客体（いわゆる直接目的補語）をとっているか否かが大きく影響することは言うまでもない。但し、例えば

(49) Elle **commence** sa journée par un quart d'heure de prières.
／彼女の１日はまず15分間のお祈りから**始まる**。（『小学館ロベール仏和大辞典』“commencer”の項）

(50) Quand est-ce que vous **finissez** ce travail？
／この仕事はいつ**終わります**か。
（500語：167）

のように、動詞が客体をとるにもかかわらず日本語自動詞が対応するケースが存在する。

(49)、(50)の日本語表現を他動詞表現に置き換えると

(51) 彼女は１日をまず15分間のお祈りから**始める**。
(52) この仕事をいつ**終えますか**。

となるが、日本語の表現としては自動詞を用いる方がより自然であろう。

(49)、(50)の日本語表現においては、対応する他動詞が存在するにもかかわらず、自動詞を用いることによってコトガラが自然に生じたもののように表現されており、いわゆる「＜ナル＞的言語」といわれる日本語の表現構造の特徴があらわれている。

ちなみに、日本語表現との間に表現構造の相違[22]が生じている例としてはこのほか、例えば“intéresser（関心を引く／興味を持たせる）”、“ennuyer（退屈させる）”、“plaire（（人の）気に入る／（人に）好かれる）”、“permettre（可能にする）”、“empêcher（妨げる）”を用いた

(53) Apprendre le français, ça vous **intéresse**？
／フランス語を学ぶこと**に興味がありますか**。（中村 2001 a：8-9）

(54) Ce film m'**ennuie**.
／その映画は私には**退屈だ**。（同上：11）

(55) Ce livre me **plaît**.
／私はこの本が**気に入っている**。
（同上：24）

(56) Le mauvais temps ne nous **permet** pas d'aller à la montagne.
／悪天候なので私たちは山に行**けない**。
（中村 2001 b ：118）

(57) Ces bruits nous **empêchent** de dormir.
／その騒音で私たちは眠**れない**。
（中村 2001 a ：123）

などが挙げられる[23]。これらにおいては、コトガラを「無情物がヒトに対して何らかの作用をおよぼす」として表わすフランス語表現に対し、「ヒトについてどうであるか」として表わす日本語表現が対応している[24]。

このように、フランス語動詞の適切な運用のためには、各動詞の自動詞、他動詞としての意味・用法を理解することのほか、表現構造に反映される日仏両言語話者の発想の相違についても知っておくことが重要である。

2.3 身につけ動詞と動作・状態 ── "mettre"、"porter"、"avoir"、"s'habiller"

"mettre"、"porter"、"avoir" には、身につけ動作を表わす用法がある。いずれも衣服・装身具などを身につけることを表わすのに用いられるが、日本語の「着る」、「はく」、「かぶる」、「はめる」などのような身体部分による使い分けはない。一方、"s'habiller" は「服を着る」を表わす動詞であり、「何を身につけるか」を含意しているため、

(58) Il **s'habille** avec élégance.
／彼は趣味のよい**服装をする**。
（中村 2001 a ：18）

のように、客体を表わす成分をともなわない[25]。

また、"mettre" は

(59) **Mets** ton imperméable, il va pleuvoir.
／レインコートを**着なさい**、雨が降るよ。
（21 世紀：445）

のように動作そのものを表わすのに対し、"porter"、"avoir" は

(60) Elle **porte** une robe longue.
／彼女はロングドレスを**着ている**。
（500 語：67）

(61) Elle **avait** une robe bleue ce jour-là.
／彼女はその日青いドレスを**着ていた**。
（『ディコ仏和辞典』"avoir" の項）

のように身につけた状態を表わすという相違がみられる。この点は、英語の "put on" と "wear"、"have" との間にみられる使い分けと同様である[26]ため、英語を学んだことのある日本語話者にとっては理解しやすいと思われる。但し "mettre" は、例えば

(62) Vous **avez mis** une belle cravate.
／すてきなネクタイを**しています**ね。
（『ディコ仏和辞典』"mettre" の項）

のようにいわゆる複合過去形の形で「すでに身につけている」を前提とした表現として用いることが可能である。このことは、

(63) Qu'est-ce qui se passe ? Tu **portes** une jolie robe ! （21 世紀：446）

(64) Qu'est-ce qui se passe ? Tu **as mis** une jolie robe ! （同上）

のいずれに対しても

(65) どうかしたの？ 素敵なドレスなんか**着こんじゃって**！（同上）

が対応し得ることによって理解できよう。

このように、日本語であれば身につけ動詞の「**テイル**」形式によって表わされる状態が、フランス語においては“porter”、“avoir”の現在形、“mettre”の複合過去形という異なる形式により表現される。このことは、身につけ動作を表現するのに必要な知識であるにとどまらず、

(66) J'ai **réservé**. ／**予約をしてあります**。
（川口ほか2000：126）

(67) Il **est divorcé**. ／彼は**離婚している**。
（久松2011：414）

のように、非身につけ動作を表わすフランス語動詞の複合過去形に対して日本語の「**Vテアル**」あるいは「**Vテイル**」が対応するケースについても目を向けるきっかけとなろう。初学者の場合には、複合過去形を学ぶに際して「過去の行為を表わす」用法に意識が向きがちであるが、結果をともなう動作を表わす動詞表現の場合には、日本語に置き換えるに際して注意が必要である[27]。入門・初級のテキストである川口ほか2000：126は、会話でよく使われる複合過去形の用法として「過去の行為」や「今までの経験」とならんで「現在における完了とその結果」を挙げている。同様に、藤田／清藤 2002：71には、複合過去形は「過去のある時点において完了した事実」を表わすほか、その事実が現在におよんでいる結果を表わすことも可能である旨の記述がみられる。また、目黒2000：253は、フランス語の複合過去には「過去」を表わす用法のほかに「現在完了」を表わす用法があり、いずれも過去の動作・状態を完了した＜点的行為(action point)＞としてとらえたものであるとし、現在完了を表わす用法の一つとして「現在までに完了した動作、あるいはその結果としての現在の状態を表わす」ことを挙げている。さらに田辺2007：288は、複合過去は過去のある時期において完了した行為・状態等の事実を示す一方、その事実の行なわれた時期がいまだ終了していないか、あるいはその事実の結果が現在に印象を残しているなど、何らかの意味で現在とつながりを持っている場合に用いられるとした上で、

(68) J'ai écrit une lettre.
／私は手紙を書いた。

は

(69) J'ai ici une lettre écrite.
／私は書かれた手紙を持っている。

の意であるとして複合過去が現在とつながりを有することを説明しようとする考え方を紹介している。これらの記述からは、複合過去形は動作そのものが完了したことを時間的な点としてとらえたものでありながらも、動作の結果として生じた状態が発話時に残っていることを前提として用いることが可能なことがみてとれ、そのような場合には日本語の「**Vテアル**」、「**Vテイル**」を用いた表現が対応するケースが生じえると考えられる。このことは、(66)、(67)のフランス語表現について言えば、「予約をした」、「離婚した」という過去の結果が発話時においてそのまま残っており、「現在予約中である」、「離婚して現在は独身である」[28]という事実を

前提とした表現であるということである。

3. おわりに

以上、入門・初級レベルにみられるフランス語の語彙・文法現象のうち、学習者にとって盲点・弱点となる可能性が高いと思われるものをいくつかとりあげた。外国語学習が音声・語彙・文法上の知識の暗記作業をともなうことは当然であるが、正しい理解・運用のためには、母語との間に存在する共通点・相似点や相違点が明確に示される必要がある。語彙・文法面についていえば、学ぶ対象たる言語における類義語の使い分けや、対応する日本語語彙との相違点、言語話者によって異なる表現構造の相違などである。それらの重要性は、学習者がレベルアップし、より複雑なコトガラを表現するようになるにつれて高まっていくが、入門・初級レベルのような早い段階からこのような現象になじんでおけば、その後の学習にスムーズにつながると思われる。これらの知識を入門・初級レベルにおいてどのように提供するかは難しい問題であるが、他言語を学ぶ過程において不可欠であることもまた事実であろう。これらのことを日仏対照研究の観点からみれば、語彙・文法レベルにおいて何を対象として考察を行なうべきかについてのヒントを与えてくれるものである。対照研究においては、青木 1989：292 の記述にみられるように、日本語学やフランス語学の枠内で扱われる問題を対照可能な問題に据え直す必要があり、それによって、それぞれの言語だけを見ていたのでは思いつかないような新たな視点を設定することが可能となり、意義ある研究につながっていくのである。本稿でとりあげた“dans”と日本語格助詞との対応関係や、動作の方向性、動詞の自他と表現構造、身につけ動詞と動作・状態、などの問題は、いずれも両言語の対照を通してはじめて正面に浮かび上がってくるものであろう。本稿における問題提起が、いささかなりとも日仏対照研究に対するヒントとなれば幸いである。

注

1) 目黒 2000：329 には、椅子などに腰を下ろす動作を表わす場合、“fauteuil”を除けば“**sur** une chaise”、“**sur** un banc”、“**sur** un canapé”、“**sur** le lit”のように“sur”が用いられる旨の記述がみられる。但し『新フランス文法事典(“dans”の項)』には、“s'-asseoir **sur** un fauteuil”が時に成立する旨の記述がみられる。
2) 『ディコ仏和辞典(“avenue”の項)』は、“avenue”を「並木のある大通りで邸宅・公共建造物などに通じるもの」としている。「通り、道(路)」を表わす語としては他に、“chemin”、“route”、“voie”などが存在し、それぞれ「田舎・野山の未舗装の道」、「都市間の道路・街道」、「(昔の)街道」を表わす。ちなみに“voie”は「道路・鉄道・運河などの交通路」を表わすことも可能である。
3) 例えば“rue Racine”、“avenue des Champs-Elysées”、“boulevard Saint-Michel”などが挙げられる。
4) “dans”が「の中(ナカ)」を含意する点、“rue”が囲まれた空間のイメージを有する点については、青木2005：248、251を参照。
5) 目黒 2000：329 には、“rue”には“marcher **dans** la rue(通りを歩く)”のように“dans”が、“boulevard, chemin、route、place、trottoir”には“sur”が用いられるのに対し、“avenue”には“se promener **dans** 〔**sur**〕 l'avenue(大通りを散歩する)”のように“dans”、“sur”のいずれを用いることも可

能である旨の記述がみられる。これに対し『新フランス文法事典(“dans”の項)』には、“passer **dans** le chemin(道を通る)”、“rencontrer qn **sur** le chemin(道で出会う)”のような表現例が挙げられており、移動動作・非移動動作のいずれと組み合わされるかが“dans”、“sur”の選択に対して影響を及ぼす可能性がうかがわれる。

6) 本稿でとりあげる日本語格助詞の働きについては、森田 1989：344-345、760-761、888-889、1249、1251-1252、1254-1255、奥田1983a、同1983b、同1983c、成戸2009：8-30、67-102、126-148、169-192を参照。

7) このような対応関係が存在する点については、山田2005：49-50を参照。

8) 但し、鏡台や壁に固定された鏡を前提とした場合よりは、手に持って使う鏡を前提とした場合の方が、「鏡」の手段としての性格がより明確であると考えられる。この点については成戸2010b：66-67を参照。

9) これらの点については、成戸 2009：22、36を参照。

10) 客体の移動を表わすケースは奥田 1983c：27-28の「とりつけのむすびつき」を、主体の移動を表わすケースは同 1983b：291-298の「ゆくさきのむすびつき」、「くっつきのむすびつき」を表わす連語にそれぞれあてはまると考えられる。

11) この点については森田1989：889を参照。青木 1989：291 に挙げられている“noter **dans** l'agenda／手帳**ニ**メモをする”は客体の出現を表わす表現であるが、客体が最終的に「**ニ**」によって示される到達点に位置することとなる点においては(21)、(22)の場合と同様である。

12) ちなみに、「**ニ**」に近い働きを有する「**へ**」が対応する“Va **dans** ta chambre, Paul. ／ポール、自分の部屋**へ**行きなさい。(泉1989:71-72)”のようなケースも存在するが、動作がトコロに向かうことを要件とする点においては「**ニ**」の場合と同様である。「**ニ**」、「**へ**」の相違について森田1989：889は、前者を用いると帰着場所の意識が、後者を用いると移動の方向性の意識がそれぞれ強まるとしている。

13) 「N(トコロ)・カラ」を用いた表現が対応する(28)に対し、『新フランス文法事典(“dans”の項)』には、“copier qch **dans** un livre／本**カラ**写しとる”、“puiser de l'eau **dans** le tonneau／樽**カラ**水を汲む」のような「N(非トコロ)・**カラ**」を用いた他動詞表現が対応する例が挙げられている。

14) 「移り動くトコロ」はその範囲内で移動動作が行なわれる空間をさす。この点については、奥田1983c：140、成戸2009：127を参照。ちなみに森田1989：1249は、「移り動くトコロ」よりも広い概念として「経過する場所」をもうけている。

15) 方向性が定まっているか否かの相違と「**デ**」、「**ヲ**」の使い分けとの関わりについては、成戸2009：32-133を参照。

16) “sur”に対しても、“Nous avons joué **sur** la plage. ／私達は海岸**デ**あそんだ。(泉1989：71)”、“Je suis **sur** la plage. ／浜辺**ニ**います。(NHK2003年4月：27)”、“Mettez **sur** la table les pots de confiture et un pot de yaourt pour chaqun. ／テーブル**ニ**ジャムの瓶と各人に1つずつヨーグルトを置きなさい。(中村2001a：50)”、“Tu peux le télécharger **sur** le Web. ／インターネット**カラ**ダウンロードできる。(NHK2003年9月：30-31)”のように様々な日本語格助詞

が対応する。この点については、さらに田辺2007：416を参照。

17）“apprendre”が「教える」を表わす場合には相手を“à”によって示す。この点については21世紀：42を参照。

18）このことは、「私は**彼から**習った／彼は**私に**教えた」、「私は**彼から**借りた／彼は**私に**貸した」のような表現例に端的にあらわれている。

19）「習う・学ぶ」、「教える」のいずれかに限定された動作を表わす語としてはそれぞれ“étudier”、“enseigner”が、「借りる」、「貸す」のいずれかに限定された動作を表わす語としてはそれぞれ“emprunter”、“prêter”が存在する。但し、藤田／清藤 2002：109に述べられているように、“emprunter”は「無料で借りる／お金を借りる」を、“louer”は「賃借りする」を表わす場合に用いられるという相違がある。

20）例としては“他向我**借**钱，可是我没**借**。／彼はわたしから金を**借り**ようとしたが、わたしは**貸さ**なかった。”や、“哥哥**给**我一支铅笔了。／兄ちゃんがぼくに鉛筆を１本**くれた**よ。”、“我**给**你这个。／君にこれを**あげよう**。”のようなもの(『中日大辞典(“借”、“给”の項)』)が挙げられる。

21）但し自動詞“finir(終わる)”に対しては、“Ça s'est fini tard hier soir？／昨日は遅く終わったの？(NHK2003年８月号：24)”のようないわゆる代名動詞の“se finir(終わる)”も存在し、両者の使い分けについての説明が必要である。

22）「表現構造の相違」とは、「表現から統語構造の相違を取り除いてなお残る相違」をさす。この点については國廣 1974ａ：48-49、同1974ｂ：47-48、成戸2009：195-196を参照。

23）(55)の“plaire”は自動詞とされているものの、他動詞とされる“ennuyer”を用いた(54)との間に統語上の相違はみられない。

24）但し一方では、“Ce genre de film n'-intéresse pas le grand public. ／この種の映画は大衆の興味を引かない。(『ディコ仏和辞典』“intéresser”の項)”のように日本語他動詞が対応するケースも存在する。

25）“mettre”、“porter”、“avoir”には、日本語における「(服を)着る」、「(スカート・ズボンなどを)はく」、「(帽子を)かぶる」、「(眼鏡を)かける」、「(ネクタイを)する」のような身体部分による使い分けはない。この点については藤田／清藤2002：67、成戸2009：196-199を参照。“s'habiller”が客体を表わす成分をともなわない点については、21世紀：444を参照。

26）この点については藤田／清藤2002：67、21世紀：445を参照。

27）青木1989：291は、フランス語の複合過去形と日本語助動詞「**タ**」の対応関係に言及し、両者が常に一対一で対応するわけではない点についての指摘を行なっている。

28）久松2011：414によれば、(67)のフランス語表現は「今も離婚した状態のまま」であることを、“Il **a divorcé** l'année dernière.”は「離婚したが、今の状態は不明」であることをそれぞれ前提とした表現である。

参考文献

・愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典(増訂第二版)』，大修館書店(1987)。

・青木三郎 1989.「文法の対照的研究 ── フランス語と日本語 ──」，山口佳紀編集『講座日本語と日本語教育 第５巻 日本語の文法・文体(下)』，明治書院，290-311頁。

・青木三郎 2002.「フランス語と日本語との空間表現の対照 ── 中と dans について ──」,『日本語学』2002 年 7 月号(VOL.21), 明治書院, 74-83 頁。
・青木三郎 2005.「日仏語の空間表現の対照的研究 ── dans とナカの意味分析」, 木下教授喜寿記念論文集編集委員会『フランス語学研究の現在 ── 木下教授喜寿記念論文集 ──』, 白水社, 248-261 頁。
・朝倉季雄『新フランス文法事典』, 白水社(2002)。
・泉邦寿 1989.『フランス語、意味の散策 日・仏表現の比較』, 大修館書店。
・『NHK ラジオ フランス語講座』2003 年 4/5/8/9 月号, 日本放送出版協会。(略称 NHK)
・奥田靖雄 1983 a.「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」, 言語学研究会編『日本語文法・連語論(資料編)』, むぎ書房, 325-340 頁。
・奥田靖雄 1983 b.「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」, 言語学研究会編『日本語文法・連語論(資料編)』, むぎ書房, 281-323 頁。
・奥田靖雄 1983 c.「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」, 言語学研究会編『日本語文法・連語論(資料編)』, むぎ書房, 21-150 頁。
・川口裕司／川口恵子／クリスティアン・ブティエ 2000.『ゼロから話せるフランス語』, 三修社。
・國廣哲彌 1974 a.「人間中心と状況中心 ── 日英語表現構造の比較 ──」,『英語青年』1974 年 2 月, 研究社, 48-50 頁。
・國廣哲彌 1974 b.「日英語表現体系の比較」,『言語生活』1974 年 3 月, 筑摩書房, 46-52 頁。
・Claude ROBERGE／Solange 内藤／Fabienne GUILLEMIN／加藤雅郁／小林正巳／中村典子 2002.『21 世紀フランス語表現辞典 ── 日本人が間違えやすいフランス語表現 356 項目 ──』, 駿河台出版社(2 版 2004)。(略称 21 世紀)
・(財)フランス語教育振興協会編『CD・イラストで覚える フランス語基本 500 語』, 朝日出版社(1998)。(略称 500 語)
・『小学館ロベール仏和大辞典』, 小学館(1988)。
・篠沢秀夫／ティエリー・マレ 2003.『フランス語の常識 日常表現は文化の鏡』, 白水社。
・田辺貞之助 2007.『フランス文法大全』, 白水社。
・中條屋進／丸山義博／G. メランベルジェ／吉川一義編集『ディコ仏和辞典』, 白水社(2003)。
・中村敦子 2001 a.『音読仏単語 1 日常生活編』, 第三書房。
・中村敦子 2001 b.『音読仏単語 2 日常生活編』, 第三書房。
・成戸浩嗣 2008.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み」, 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所『コミュニティ政策研究』第 10 号, 91-105 頁。
・成戸浩嗣 2009.『トコロ(空間)表現をめぐる日中対照研究』, 好文出版。
・成戸浩嗣 2010 a.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み(2) ── 中国と日本 ──」, 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所『コミュニティ政策研究』第 12 号, 111-126 頁。
・成戸浩嗣 2010 b.「“dans” を用いた空間表現をめぐる日仏対照研究 ── トコロと手段 ──」, 愛知学泉大学コミュニティ政策学部『コミュニティ政策学部紀要』第 13 号, 61-80 頁。
・成戸浩嗣 2011.「言語を通して見る異文化 ── フランス語と日本語 ──」, 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所『コミュニティ

政策研究』第13号，21-36頁。
・久松健一 1999.『英語がわかればフランス語はできる！』，駿河台出版社。
・久松健一 2011.『ケータイ〔万能〕フランス語文法 実践講義ノート』，駿河台出版社。
・藤田裕二／清藤多加子 2002.『英語もフランス語も 比較で学ぶ会話と文法』，評論社。
・目黒士門 2000.『現代フランス広文典』，白水社。
・森田良行 1989.『基礎日本語辞典』，角川学芸出版(10版 2005)。
・山田博志 2005.「道具と場所の間」，東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を探る フランス語学の諸問題Ⅲ』，三修社，48-59頁。
・Roberge, C. et Mehrenberger, G.,『現代フランス語前置詞活用辞典』，大修館(1983)。
・Guy Capelle, Noëlle Gidon(1999)：《REFLETS 1》，Hachette-Livre.

(2012. 2. 13)